



内野 博之

医学科
麻酔科学分野
主任教授

東京医科大学卒業
東京医科大学博士課程修了
博士（医学）
2009年より現職

ご家庭での生活

家族は医師の妻と娘2人です。長女が生後3か月の時に留学したスウェーデンでは男性も育児休業が義務化されています。保育園は1歳になると利用できます。3年間滞在して教育費や医療費が不要という手厚い福祉制度が確立しているのを知りました。未来を託す子どもを国全体で育てるというコンセンサスがあり、子どもが泣いていても周りはニコニコしていて、苦労なく子どもを育てられる社会でした。家事、育児の分担は夫婦で5:5が理想なのですが、私自身は、昼間は研究室業務が忙しく子どもの送り迎えと夜や週末の育児を担当したぐらいで7:3ぐらい、慣れない外国での子育てでは妻に負担をかけました（すみません）。

ボスとして大切な仕事はどのようなことですか？

トップとして教室のビジョンを明確に示すこと、決断することに加え、最終的な責任を取る姿勢を見せています。具体的には、どういう教室を築いて、いかにプロフェッショナルなドクターを育てるのかということになります。そのためには、医療の原点である「病める患者に対して患者中心の医療を提供するには何が求められているのか」ということを医学部の低学年から教えていく医学教育が必要です。医療とは「思いやりのある技能の実践」です。医療を通じて患者さんを救うという使命感を持つ医師を目指してもらうように指導しています。また、医局員の考え方をよく見極めるよう話を聴き、必要なことはできるだけサポートすることもマネジメントに欠かせません。

麻酔科学について一言

麻酔科学は手術麻酔だけでなく、集中管理、ペインクリニック、緩和医療と専門の選択性が高い分野です。疼痛管理、全身管理の知識や技量と、現場では集中力が求められ、自分の医療行為が直接的に治療結果に結びつき達成感もあります。また、病棟患者を持つ可能性が少なく、オンとオフが明確なためか女性が多く進出する分野になっています。

ワーキングマザーに伝えたい

女性は出産、育児で働く時間が制限されるとキャリアを積み上げることが難しくなります。当科ではママさん医師の業務を他の医局員がかなりサポートしています。私はママさん医師を集めて「子どもの急な病気で仕事が中断するのはやむを得ないです。それでも週末昼間に時間を作り業務を補助して、先生方をサポートしている医局員の負担を軽減してほしい。お互いさまという考えは必要だと思います。自分なりにできることを始めてください。」と話をします。ママさん医師であっても当直免除などを既得権と取らずに、周囲への感謝とフルタイム勤務に復帰して対等に働くために努力する姿勢を皆が期待しています。そうすることで周囲の理解と協力が得られやすくなると思います。出産後、職場復帰してキャリアを積み、指導者になる女性医師が増えることを願っています。

保育園を整えたい

私が学生の頃は医学部に女性は1割程度でしたが、今は半数近く女性がいます。女性医師たちの離職は、育児インフラの整備が不十分であることも重要な因子なのです。まずは、職場に保育園や育児支援システムが十分あればいぶん働きやすくなり、勤務を継続できると思います。人が離れていかない組織にすることも大事です。女性が働くのに一番制限がかかっていることを排除しないと、女性の活躍は絵に描いた餅に過ぎなくなります。保育園をはじめとして今後も必要なことは大学全体で解決していくよう働きかけたいです。

自分なりの努力で、「お互いさま」と言えるよう、対等に働いている姿勢を

未来の女性研究者への応援メッセージ

21世紀は医療も女性医師、女性研究者の時代です。

医療の細分化が進み、例えば性差医療など、女性のための女性による診療、研究が社会で求められています。女性医師にしかできないこと、女性であるという特徴を生かす領域も多くあります。21世紀の医療の未来を拓くためには女性自身が活躍できるように医療界を発展させる必要があると思います。「自分がなぜ医師と云う道を選んだのか」という自らの志と社会における使命を再認識して頑張ってもらいたいです。その頑張りが女性医師の社会的環境の向上に繋がると思います。もちろん、並行して男性の理解と意識改革も必要です。スウェーデンのように社会の中で女性医師が男性医師と対等に必要だと認識されるようになってほしいですね。

